
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 141 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2004.09.02 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1521 部*****

□ 目 次 □-----

<今週の提言>自然からの逆襲 大山勝夫

<読者の声>ヒロミンさんから

<79歳の意見>今の内に戦争・原爆被災者の声を聞こう 原田 勉

<旬を食べる—野良からの便り・8> “オクラ（青納豆）” 小泉浩郎

<山崎農業研究所情報>

◇山崎記念農業賞・記念フォーラム（2004年7月3日）講演要旨（速報）

—国民の森林づくり：その目的と技法を問う—

【その4】森林との新しい出会い：桜山きづきの森の経験

大内 正伸（イラストレーター、未来樹2001代表）

<日本たまご事情>鶏供養 愛鶏園・齋藤富士雄

<農文協図書館情報>（8/31更新） 農文協図書館・原田太郎

<編集後記・同人の近況報告>8月19日～9月1日

<今週の提言>自然からの逆襲

この夏、東京ではヒートアイランド効果も加わって記録的な酷暑となった。一方、新潟・福島豪雨（7月12～14日）、福井豪雨（7月17～18日）続いて台風10号（7月29日～8月2日）による四国地方での水害など局地的な気象災害が発生した。去年はヨーロッパ、とくにフランスの猛暑が伝えられるなど、このところの世界的な気象異変には不気味なものを感じる。

科学史・科学哲学者の塚原東吾氏は今年の『現代思想』7月号で、「自然の再侵襲—気候変動が示唆すること—」と題した論文で、昨今の気象異変を見事に予見している。氏によれば気候変動は人間活動への「自然の再侵襲」、つまり人間の活動に対する自然からのリアクションであるとしている。そのひとつ

に地球温暖化があげられる。温暖化がもたらす世界の「風系」の錯乱は、これまでの標準的な気圧配置が変容することになり、突発的な異常現象が発生しやすいという。今年の日本の暑い夏はまさにこのとおりであった。

東京が記録的な酷暑に見舞われた7月20日、その日の朝日新聞で偶然にも哲学者・梅原猛氏は「反時代的密語」のなかで指摘した次の内容が印象に残る。人類は科学技術に依拠したすばらしい文明を生み出し、多くの人たちはかつて味わったことのない豊かで便利な生活を享受することが可能になった。しかし、近年、この文明にも限界が見えはじめてきた。その原因は人間による無制限な自然支配が、環境を破壊し、このままではやがて人類の滅亡を招くのではと、警告する。

気象庁によれば今年は観測史上最も暑い夏になるのではと予測する。そんな暑さのなかで、昨今のこのような気候変動は飽くなきまでに自然を制御して経済合理性を追求する人類に対して、自然からの逆襲ではないかと感じられるのである。

大山 勝夫

山崎農業研究所会員、東京生命科学学園講師

y.noken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●08/19 ヒロミンさんから：葡萄が実りました

鉢植えを買ってきて壁に沿わせて植えた葡萄が2階のベランダまでつるをのばしました。

農文協「ブドウの絵本」を参考に、3年目の今年20房ほどの巨峰が色づいています。

大粒で甘く確かに巨峰の香りがします。

農薬は冬季の石灰硫黄合剤のみです。

ふるさと山梨の両親に自慢しています。

今年は棚を本格的に作り、来年以降にそなえます。

<79歳の意見>今の内に戦争・原爆被災者の声を聞こう

8月は戦争と平和を考える月である。

1945年8月6日の広島原爆と8月9日の長崎原爆投下から59年経った。当時被爆した人たちは多くが亡くなり、生存者も高齢になってきた。広島・長崎での被爆体験は、貴重なもので、どの人も一様ではなく千差万別である。今の内にその人たちの声を聞いておこう。

8月9日NHKテレビで、昨年、長崎原爆の平和祈念式典でろうあ者として初めて被爆の惨状を訴えた山崎栄子さん（77歳）の話を聞いた。18歳で被爆して、ろうあ者であるため原爆の実態を知らされたのは一年後だった。それまでの間に出逢った被災者の黒こげ死体、火傷、内蔵露出、放射能の恐ろしさなどを、自分の苦難の半生をまじえて体いっぱい手話で語り継ぐありさまは私にとって衝撃的な感動であった。

そして、白内障になっても「眼が見えなくなっても、この腕があるさ、生きてるかぎり語り伝えよう」という決意に、わが身に比べても勇気づけられた。

NHK「体いっぱい原爆を語り継ぐ」

<http://www.nhk.or.jp/summer/gtv/gtv30.html>

<http://www.nhk.or.jp/nagasaki/bangumi/genbaku/genbaku.html>

(短期掲載)

8月15日は、西東京市保谷公民館で「被爆者のお話を聞くつどい」に参加し、広島の被爆者、真実井房子さん（83歳）の話をきいた（以下一部要約）。

真実井（まみい）さんは、当時23歳、2歳の長男と妊娠中の身だった。自宅の下敷きになり、近所の夫婦に助け出された。この夫妻も血だらけになっていたが、ガラスの破片を体中にうけた長男も助けてくれた。その夫妻がその後どうなったか今でも解らない。

広島は何がどうなったか、黒こげになった人や大火傷したひと、裸でもがき苦しむ人、助けてくださいと泣き叫ぶ人、水を下さいという人などを呆然と見ていただけだった。わが子を守り自分を守ることに精いっぱい、他の人を助けるとか、水を欲しがるとにも何一つ応えることができなかった。それが真実です。今まで真実が話せなかった。

他の二人の参加者からも広島被爆とその惨状の話があった。

この会は、毎年8月に開いていて、今年で20回目だという。毎回、原爆写

真展と映画上映があり、継続してきた「核戦争の恐ろしさを子どもらに伝える会」の長期継続の努力に感謝した。(連絡先：0424-61-3414 奥津)

西東京市社会福祉協議会サイトから、「被爆者のお話を聞くつどい」案内
<http://www.furemachi.jp/kosodate/monthly7.htm>
(短期掲載)

「公民館だより 9月号」平和を考える(原田が戦時体験の話をした)

地域に住んでいて、何もできなかったが、頼まれて、自分にできることだけを話した。戦時中、谷戸のブウブウと言われていたことを知ってる人が少なくなった。中島飛行機のエンジン田無試運転工場が谷戸にあり、その爆音が田無中に響きわたった。騒音問題も戦中には文句がいえなかった。そのころの工員の仕事と市民の暮らしはどうだったか。

今も残る戦争の傷跡は田無駅前昭和20年4月の空爆で130人が犠牲になった。7月には原爆の模擬爆弾が柳沢に投下され農家の人が死亡したなど太平洋戦争は私たちの町にも大きな被害を与えた。

「公民館だより」西東京市に全戸配布、市内地域図書館と公民館で無償提供
問合せ先：西東京市谷戸公民館 電話 0424-21-3855 (平井)

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

<旬を食べる一野良からの便り・8> “オクラ (青納豆)”

オクラは、あのヌメリ、ネバネバが、健康に良いと最近人気がある。ネバネバの正体は、ガラクタン、アラバン、ペクチン、ムチン等である。胃腸、心臓、肝臓によく、コレステロールの抑制、動脈硬化・糖尿病の予防になり、さらに美肌を作るといふ。常食にしていると死なずに済みそうな効用だが、とりあえず、夏ばて解消には最適だろう。

オクラは、てんぷら、汁のみ、おひさしと幅広い料理に使われる。産毛があるので、軽く塩を振りまな板の上で転がして下茹ですると口当たりが良くなる。

だが、オクラらしい食べ方は、採れたての生のオクラを軽く水洗いし、できるだけ細かく輪切りにきざむ。器に移し、納豆のように箸でかき混ぜる。しっかり粘りが出たところで、かつお節をかけ、ちよっぴりの醤油でいただく。これが旨い。「青納豆」といわれる所以だ。特有の青臭さがビールの友に良い。ただ、それには収穫のタイミングと鮮度が命。開花して4～5日、7～8cmの大きさ、指でポッキンと折れる頃である。それを過ぎると鋏で切るしかなく、筋が固くなってしまふ。

オクラの花は、野菜の中では豪華である。ハイビスカスに似たクリーム色の大きな花を咲かす。共にアオイ科の植物で「秋葵」の別名がある。コスモスの「秋桜」を思い出す粋な名前である。早朝咲いて午前中にはしぼんでしまう儂い花であるが、朝露を抱く花卉は詩心を誘う。

こうして、ポピュラーな野菜の1つになっているが、本格的にはやりだしたのは1970年代である。わが国へは江戸時代末期に導入されたというから、長い潜伏期間を経て、この頃の健康ブームに頭角を現したということか。高知、宮崎、沖縄等暖かい所が主産地だが、冬から春にかけてはタイ、フィリピンから輸入されている。

小泉 浩郎

山崎農業研究所事務局長

y.noken@taiyo-c.co.jp

<山崎農業研究所情報>

◇山崎記念農業賞・記念フォーラム（2004年7月3日）講演要旨（速報）

—国民の森林づくり：その目的と技法を問う—

【その4】森林との新しい出会い：桜山きづきの森の経験

大内 正伸（イラストレーター、未来樹2001代表）

鋸谷式育林法を林業の新しい形として取り入れる。イベントを計画する。間伐材で丸太小屋をつくるなど、体験を豊富にする機会をつくる。このような森と市民を結ぶ活動が森林を守ることに大きな意味を持つと思われる。

- 1) それは山主さんの疑問から始まった。
- 2) 荒れた人工林を逆手にとる森遊び

3) 人の輪の広がり、活動の広がり

4) 鋸谷式育林法と桜山きづきの森の活動から見えたこと

以上の話をスライドを用いて説明があった。

(文責・安富)

【参考】

＃大内正伸さんの HP (鋸谷式育林法の話が充実している)

<http://tamarin.cside21.com/index.html#Anchor206721>

＃「桜山きづきの森」の活動

<http://tamarin.cside21.com/kizuki0.html>

＃鋸谷茂・大内正伸共著

『図解 これならできる山づくり 人工林再生の新しいやり方』

発行：農文協 価格：¥1,950

<http://www.ruralnet.or.jp/books/2003/54002127.htm>

<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4540021273/>

<日本たまご事情>鶏供養

9/16 (木)、今年も神奈川県養鶏協会 (角田克己会長) の主催で鶏供養が南足柄市の大雄山最乗寺でとり行われる。

戦後五十年以上毎年、業界の先輩たちが守り続けてきた大切な行事である。一時期、同じ曹洞宗の横浜市 総持寺と交互にこれを行っていたが、最近は大雄山最乗寺専門である。

供養は、木立に囲まれた立派な本堂で僧二十数名によって本式に執り行われる。参列者も少なくなったとはいえ現在でも200名を超える。神奈川県が養鶏が盛んなときには300名を超えていた。

祭壇には籠にいれられた雄雌のニワトリが供えられる。これがどういう訳か読経の最中に呼応して「コケッコウ」と鳴いてくれるのである、不思議な話だがそうなる確率が過去断然高かった。

読経のリズムがニワトリを刺激するのか判らないが、読経そして回向のあと、老師による法話があり、このことについて「皆さんのニワトリに感謝する気持ちが通じたのです」などと話し参列者を嬉しがらせてくれた。今年は残念ながら鳥インフルエンザの心配があるため、生きたニワトリの参加が危ぶまれている。

私は式中「慰霊のことば」をささげる役回りであるが、手元に50年以上先輩たちが練り上げたその「慰霊のことば」の原稿がある。時代によってその内容は多少変わるが、骨子となるものは一貫して変わらない。

それは、ニワトリを私たち人間のパートナーとしてとらえ、人間の為に犠牲となったその霊に感謝し、その冥福を祈るものである。

日本人は宗教の如何を問わず、動物にたいしてこの様に優しい気持ちをもっている。西洋型の文明国に現在吹き荒れる動物愛護運動をみると、なにかそこに根本的な欠陥があるように思えてならない。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp>

<農文協図書館情報> (8/31 更新)

◆2004.7.1～7.31 登録の新規収蔵図書

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html>

◆話題の図書：

『CD-ROM 付 農薬便覧 第10版』

米山 伸吾 / 安東 和彦 / 都築 司幸 編

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai023.html>

改正農薬取締法に対応。全登録農薬を使用使用方法も網羅し解説。

メーカーごとの登録内容の違いも掲載。

薬剤選びの目安となる作物別防除法も充実、混用事例集、

取扱会社一覧、農薬名索引、作物、病虫名からも引けるCD-ROM付

発行日：2004/08 農山漁村文化協会 発行

・CD-ROM 目次

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai023m.html>

◆寺尾五郎文庫

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/090teraobunko.html>

・目録その4（その5まで順次公開してまいります）

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/list/090terao/tg41/01.html>

*個人文庫は館内閲覧・コピー・FAX サービスのみ利用可能です。

農文協図書館 IT担当 原田太郎

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/>

<編集後記・同人の近況報告>（8月19日～9月1日）

いま自宅で3匹のドジョウを飼っている。近所の田んぼの水路でつかまえてきたものだ。子どもの頃はドジョウをよく食べた——正確にいうと‘食べさせられた’——が、調理するとき鍋の中であばれる音がどうも好きになれなかった。いまは、食べるほどの数は、少なくともわたしの近所ではとれない。ちなみに3匹のうち、1匹はわたしが、そして残りの2匹は長男がつかまえた。

ドジョウもまた田んぼのめぐみ、多面的機能だと思う。こうしためぐみがもっと味わえるようになるには、農の営みと自然の関係をより明らかにすること、そして、そのようなめぐみを生み出す農の営みについてきちんと評価し、支える社会の仕組みをつくることが重要なのではないか。

（山崎農業研究所会員・田口 均）

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。
- 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 142号の締め切りは9月13日、発行は9月16日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願ひ致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第141号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2004.09.02（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****